

幾山河

第四號

平成3年6月1日

発行

社団法人 沼津牧水会

目次

御挨拶・若山旅人	2
追悼・大悟法利雄先生	4
老いの豊かさ	4
御免下され	5
沼津牧水会の足跡③	6
追憶・積先生と牧水祭	10
牧水生誕の地に立つ	12
音楽イベント	14
文化講座	15
第37回牧水祭・碑前祭	16
短歌大会	17
雛の歌会	18
平成2年度事業報告	19
定款・後記	20

ご挨拶

若山旅人



若山牧水は、今から一〇五年の昔、遠く宮崎県の山深く熊本県との県ざかいに近い峡谷の村坪谷で明治十八年に生れ、この沼津の千本松原で生涯を終えました。

昭和三年の秋のことでしたからその一生は四十三年間の歲月だったわけで、今から考えれば決して長生きをしたわけでもなく、むしろ短命だったと言えるかも知りません。

上京して早稲田の英文科に在学中には、北原白秋や石川啄木と交情を深めて文学の道に分け入り、たまたま青春の苦悩と恋愛をテーマにした歌集『別離』が世に迎えられるに及んで、自然に、かねて目ざして来た小説文学から短歌文学を生涯の目的とするようになりました。それは収入の無い貧しい未来を背負わねばならぬ険しい道でしたが、牧水の若い情熱と自負の意識から見れば、その道は曾て殉教者が肩にして運んだ十字架のようなものだったのでしょうか黙々と四十三年の年月の坂を登りつめて昭和三年九月十七日に死去致しました。

その牧水にとって、この沼津の地は忘れられぬ貴重な地となりました。東京での苦しい環境からのがれて沼津に移り住んでからの牧水には、短歌の上にも随筆や紀行文の上にも本来の繊細な人間性のやさしさを織り込める身辺が、此処の地で与えられたからでした。

それは牧水がその独特な感覚でえらび取った、沼津の地、人、空気の混合体が牧水の晩年を救ったからなのだ、と私はその没後六十余年かわらずに信じて来ております。

牧水終焉の地千本松原に、その記念館が出来たのは、右のことを思い合わせれば眞に貴重なことだと思えます。しかもこれは多くの人の浄資浄念に依って建設され、松の枝越しに富士が仰がれるという絶好の敷地も、沼津市に依って選択されたものなのでした。

まことに牧水という人は仕合せな人間だったと私は思います。一歌人として、その生誕の地と終焉の地に記念館が残されて、その一生を偲んでゆく、という例を私はほかに知ることが出来ません。

このたび私は、全く予期しないことでしたが、皆様の為に在る記念館についてその館長に、とのご要請に遭遇することになったのでした。

一生を牧水顕彰のためにすごされた大悟法利雄氏の跡を継ぐように、とのことですが、ご辞退を重ねた結果思い到りましたのは、牧水のせがれとして私の余生に仕残されたことは、沼津そのものにお禮を申しあげたい、という一条でした。私はそう思い付いたことを心情として、お引き受けさせていただくことを決心いたしました。

遠くはなれて住み、時間その他の自由も利かず、加えて非常勤というかたちではありませんが、それでもお許し下さった皆様の心にお応えし努力させて頂きますので、この先を何とかぞ宜しく温かにご教導下さるよう、この紙上をかりておねがいいたします。

追悼

沼津市若山牧水記念館館長

大悟法利雄先生



牧水記念館初代館長 大悟法利雄

先生が平成二年十一月二十六日に亡くなられた。昭和六十二年の十一月一日、牧水記念館開館以来、館長として牧水記念館の発展に力を貸していただいたが、九十二歳を一期としてその長い生涯を閉じたのである。牧水記念館開館以来と書いたが、建設中も建設前も開館建設のために随分とご尽力いただいた。記念館の前身となる様々な資料の収集には、先生の尽力・協力が不可欠で、先生がおられたから記念館ができたと言っても過言ではない存在であった。記念館ができる以前から、先生は牧水祭の度に沼津に見えられ、その美声を聞かせてくださった。牧水にまつわる話も随分とせがんだものである。

大悟法利雄先生は、明治三十一年に大分県で生まれた。大正六年大分県立中津中学校卒業、二十歳の春に牧水の歌誌「創作」の社友となる。大正十一年の七月に沼津の牧水を訪問、九月に再び来沼して牧水の「みなかみ紀行」の旅の留守番をする。十一月、雑誌「週刊日本」の編集部に入社。大正十二年、二十五歳の春、沼津に住んで牧水の助手となる。五年後に牧水逝去。以後喜志子夫人を助けて「創作」と「牧水全集」の編集に当たる。「牧水全集」(全十二巻)は昭和四年に改造社から発行、昭和八年に改造社の「婦人世界」などの編集、結婚。昭和十五年、出版社新声閣を創立。翌年第一歌集「第一歌集」を刊行。しかし、この出版社は足かけ三年でやめ、以後、若山牧水研究に専心する。

「若山牧水伝記編」19年発行 「短歌読本若山牧水」25年 「短歌読本石川啄木」33年 「若山牧水全集」33年 「旅と酒と歌—若山牧水」39年 「牧水写真帖」43年 「若山牧水の秀歌」48年 「若山牧水全歌集」50年 「若山牧水新研究」53年 「幾山河越え去り行かば」53年 「若山牧水の書」54年 「若山牧水詩歌集」54年 「若山牧水歌碑めぐり」59年 「歌人牧水」60年 など牧水関係の著書も多い。歌集は第一歌集の他に、「翼」17年 「岩淵」26年 「父母」42年 「伊豆」46年 「薔薇の散歩」50年 「夢と薔薇」51年 「尾瀬と九十九里」54年 「並木道」55年 「常凡」59年 「飛魚とぶ」60年 「薔薇の病院」63年 「九十歳前後」平成二年と十二冊を数える。

大悟法先生の作風については「自由無碍・不羈奔放の歌(加藤克己)」「常凡と向日性(小島宗二)」などの評価がなされているが、ここでは静岡県歌人協会長の高嶋健一先生が短歌現代に寄せた一文を紹介して代えたい。

老いの豊かさ 高嶋 健一

最後の歌集となった『九十歳前後』のなかに「辞任届」と題する三首がある。

老いて病み一日勤めしこともなき館長として二年過ぎにき

開館のテープカットに加はりき初代館長の名のみには残らむ

わが椅子はどこにありしや一日だに遂にかけざりし館長の椅子

「沼津市若山牧水記念館館長の辞任届を書く」との詞書があるが、大悟法氏がこの記念館に寄せる思いは並々でなかったと仄聞している。所蔵の貴重な資料を惜しげもなく寄贈され、乞われて館長に就任された。しかし高齢のため非常勤ということ、地元の歌人上田治史氏が副館長として実務を担当、このすばらしい記念館は、多くの訪問者を迎えた。牧水愛好者にとってはよなき場であった。その館長を辞任されると言う歌である。責任感と寂しさ——そういった心の揺れが感得できる作品である。そして何よりも、大悟法氏の人間の誠実が心を搏つ。この辞任届は確か受理され

なかった。

『九十歳前後』には当然のことながら老いを知った作品が多い。へわが名すら誤記しかねざるこの頃のわが老いさまを知るは妻のみとていう寂しい歌もある。しかし、一方で

九十にて手習ひはじめいくばくもなきに逝かばそれもわれにふさはむ
けふよりは余生と思ふことにしてそれにふさへるペース守らむ
がある。前者は「老の手習い」、後者は「誕生日」（注九十二歳）である。
ゆるやかに、しかしながら前向きに歩いて行こうとする意志がここにあ
る。へふさ、心という語の重さを感じさせる、老いの豊かさである。

御免下され

寺田桂子

大悟法先生とは二度ご一緒に旅する機会を得た。それらの旅はお供をしたという緊密な感じではなく、こつちが勝手にご一緒させて頂いたといった印象が私には残っているが貴重な思い出であった。

一度目は五十四年秋、記念館建設の気運が盛り上ってきてそれでは各地の記念館見学をと、かの田中旭氏の音頭取りで同行九人の東北旅行であった。各自の費用を一つ袋に放り込んで、一切合財そこから支払って行くどんぶり勘定の旅は楽しいものであったが、先生は遊び好きな同行者の他愛ない行動にさりげなく同調されながら、軽々しく立入ることをゆるさない厳としたものを何時も身辺に湛えておられた。その頃もう八十才になられていたのにその足取りはすたすたと、少しの遅滞もなく呼吸も乱れずまさに旅びとのそれであって私達を感嘆させた。

二度目は六十年春、牧水生誕地坪谷へ同行四人の旅であった。先生は恰も自身の故郷に帰られたように活々として牧水ゆかりの美しい山河を案内して下さった。一泊した延岡の由緒ありげな古い旅館には、偶々山本健

吉氏がご家族連れて投宿しておられてお目にかかった。氏は「牧水断想」「牧水雑感」などの随想に先生の朗詠を高く評価した温い文章を書いておられ、改造社時代以来の知己としてお互いに懐しい存在であられたのではないだろうか。思いもかけない方の出現に私はひたすら恐懼して部屋の間をうずくまっていたので、残念ながら会話の内容は何も覚えていないのだが、あの暗い座敷に、しょうしやな健吉先生といかつい大悟法先生と並んでおられた一夕の情景は、一時代の一幅の絵であったと今にして改めて思われる。日向路の何処で先生とお別れしたのだったかと時折おもうことがあったが、お尋ねすることもなくその後お目にかかることもなく、この度ご逝去を知った。

先生のご生涯については仄聞したに過ぎないのだが、男子一生の仕事に賭けてしまわれた、貫く棒の如きものとの因縁の凄じさとそれにつれての修羅とを私は思わずにはいられない。

われなくばかの晩年の君はなく君なくば今のわれもなかりし（牧水五十年祭）

ご葬儀の当日は生憎の激しい雨であったが、何気なくつけた朝のテレビははしなくも延岡からの中継であった。カメラはあの城山の鐘楼を映しその音までも伝えてくれた。弔鐘と私には思えた。この偶然はいったい天の誰の計らみであろうかと暫く私は呆然としていた。ご葬儀は大悟法先生らしく実にいさぎよい見事に簡潔なものであった由を会葬された上田治史氏から伺い、納得する思いであった。

老われも持ついささかの叛骨と御覧下され御免下され（御免下され）



沼津牧水会の足跡③

足跡の連載も第三回目となった。この連載は三十年を超える沼津牧水会の歴史を、折りに触れては記録し、残してくれた会員の歌人、青木朝子さんによるものである。

さて、前回で昭和四十四年までを了え、今回は四十五年からである。この辺りになると、益々皆様に身近な記事になっていくと思う。なお、お若い会員の方には、会の歴史を知るに大変良い資料でもあろう。ご精読を。

44・8・8 沼津朝日「まど」欄の主張

……前略……

富士や愛鷹とともに香貫山や千本松原をうたった名歌はあまりにもよく知られているが、千本松原の一部を伐採して売り払うという話を聞いたとき、牧水は一市民として絶対反対の運動に立ち上がった。その切々たる訴えの文章は『沼津千本松原』と題して二篇にわたって若山牧水全集第八巻に収録されてある。牧水を追慕する運動は千本松原を愛護する運動に結びつけてこそ意義がある。牧水祭は一つの文学的行事としてだけでなく、広い視野に立って市民の共感を呼ぶ文化行事にしなければならない。市民の多くの意見をきいて今から準備に取りかかっても遅いと思う。

第十七回 牧水祭

昭和四十五年

○碑前祭 九月十三日午前十時 千本歌碑前

献酒と挨拶・若山旅人氏 献花と話・石井岬

さん 短歌朗読・大悟法利雄氏 沼津合唱団

○土肥松原の歌碑を訪ねて 九月十三日正午

碑前出発バス 会費八〇〇円 昼食持参

西伊豆スカイライン船原岬・土肥・松原公園

土肥館

○短歌大会 九月二十日(日) 午前十時

菊屋旅館 出詠料三百円

選者団 伊藤祐輔・井手けい子・稲葉公平・

大岡 博・桑高房治・佐藤茂正・

積 惟勝・大悟法利雄・原 昇・久

田二郎・水城 孝・森崎正明

司会 須永秀生 詠草一〇一首出席九十名
入賞作品

牧水賞(選者団選第一位)

海苔の香の匂うむすびを運び来し工事場は昼
のほてりを残す 鈴木まさ子

市長賞(互選第一位) 同前

市議会議長賞

汚染度の試しと金魚飼われいる廃水槽に朱を
透して 長田 央

教育長賞

朽ちかけし兵舎をめぐる草土堤に静もりて妖
し曼珠沙華咲く 池田 幸枝

沼津朝日賞

融け合えぬ会話のこして帰京せし娘も沈みい
む夜の歩廊に 寺田 桂子

山脈賞

朝顔の花むらさきにひと日たもつ秋たつきよ
うの深き曇りに 杉山 杏子

東海短歌賞

汚濁の世を時に嘆けど我をめぐる人みな優し
永く生くれば 井手けい子

大悟法利雄賞 同前

伊藤祐輔賞
血を吸ひて鈍き蚊の声うち払ふひとの背後に
翳る貧しさ 監持 益子

積 惟勝賞

閉鎖せる田子浦暑く静かなり港湾水深調査船
来て 上田 治史

○「人間牧水を語る座談会」 九月

大悟法利雄氏と大岡 博氏
沼津における面影 司会・田中 旭氏

○喜志子三回忌 八月二十二日 千本山乗運寺

○土肥松原 牧水歌碑除幕される 八月二十四日

ひそまりて久しく見れば遠山のひなたの冬樹
風さわぐらし

土肥館庭の喜志子歌碑

蛙鳴き夕さりくればかへらましかへらましまとふ

吾子つれてきぬ

*『牧水祭に思う』 沼津朝日新聞特集

①沼津における面影 九月十二日 青木 朝子

②喜志子夫人と沼津 九月十五日 井手けい子

③牧水の歌の面白さ 九月十七日 伊藤 祐輔

④千本松原と牧水 九月十九日 池谷ゆう軒

⑤牧水会の新しい意義 九月二十日 上田 治史

運営に協力した人々

順不同

林 輝彦・上田治史・杉山賢二・川口一麿・田
中 旭・井手けい子・伊藤祐輔・芹沢初子・長
谷川禎一・羽田寿恵子・川口和子・遠藤永太郎
青木朝子・杉山杏子・池田幸枝・積 惟勝・山
田・稲木(市役所)

第十八回 牧水祭

昭和四十六年

○碑前祭 九月二十六日午前十時 千本歌碑前

雨天

献酒と挨拶・若山旅人氏 献花とお話・石井

岬さん 原沼津市長挨拶 朗詠・大悟法利雄

氏 「しらたまの」他三首・中村義光氏作曲

の歌が発表される。地元の清酒で小宴

○短歌大会 九月二十六日午後一時 浅間神社務

所 出詠歌一一六首(三〇〇円)

講師選考者団 大悟法利雄・原 昇・稲葉公平

伊藤祐輔・積 惟勝・大林栄一・桑高房治

高原 博・高嶋健一・片山静枝

司会 岩崎竜明・森崎正明

入賞作品

牧水賞(選考者団第一位)

騒がしき晩夏ひそかに工夫らが地下へ埋めて

いる電話線

上田 治史

市長賞(互選第一位)

看とりする姉にはふれず足萎の吾の名呼びて

逝きしとや母は

山下とし子

市議会議長賞

酒の余勢借りねば言へぬ弱さかと容赦なきこ

とばうけとめてゐる

川口さかゑ

教育長賞

割烹着を脱ぎつつ涙ながれたりふかぶか凭る

べき椅子などはなく

青木 朝子

沼津朝日賞

ベル押して走り去りゆく悪童のいきいきとせ

る夏の足音

植波 靖子

東海短歌賞

病みつきて人恋う心一入の父と思えば一夜添

臥す

海瀬 みつ

山脈賞

とほり雨すぎし舗道が映す空の藍よりのぼる

真昼のほてり

杉山 杏子

○牧水祭のために、井上章久氏と井手けい子氏の

発案で、中村義光氏が牧水の歌四首に曲をつけ

ることになった。

幾山河・しらたまの・うす紅に・なびきよる

以上伊藤祐輔氏が選歌。毎年碑前祭で沼津合唱

団により合唱していただくことに決まる。

○牧水会会報 創刊号出る。十二月

運営に協力した人々

伊藤祐輔・積 惟勝・井手けい子・大林栄一・

岩崎竜明・芹沢初子・杉山芳春・滝山花子・羽

田寿恵子・三浦征江・秋元文江・青木朝子・森

崎正明・藤田 忍・寺田桂子・渡辺郁子・後藤

富士子・山田はな・石川節子・松島喜代江・渡

辺靖之・高島尚子・横江ふみ・庄司白佑・林

輝彦・田中 旭・杉山賢二・川口和子・上田治

史・川口一麿・佐藤茂正・金子安夫

第十九回 牧水祭

昭和四十七年

○碑前祭 九月二十四日午前十時 千本歌碑前

献酒・若山旅人氏 献花・井手けい子氏

朗詠・大悟法利雄氏 沼津合唱団「しらたま

の」外三首合唱 参加者九十名

○短歌大会 同日午後一時 浅間神社社務所

開会に先立ち岡本和民氏作「牧水賛歌」が上

映される。出詠九十九首(三〇〇円)

参加者九十名

講師 高原 博氏

選考者 若山旅人・大悟法利雄・高原 博

伊藤祐輔・積 惟勝の諸氏

入賞作品

牧水賞 店の灯に羽蟻むらがかりくる夜更けかがまりて

明日売る玉葱をむく

塩谷千鶴子

市長賞

軒下に海の御守護の札貼られ紐せゆくまの

ひそけき漁村

渡辺 靖之

市議會議長賞

祭り果てし深夜の街のシャベルカーひと一人
乗せ深き穴掘る 旭 登美子

教育長賞

味噌部屋にかくれて泣きし嫁の日より継ぎ来
し四十年の漬梅匂う 林 よし子

沼津朝日賞

並び寝もつかのまにして夏の夜を転げあう孫
らの間にちぢまる 岩柳 はな

山脈賞

山の宿かこめるぶなを打ちならし朝の日照雨
は光りつつ降る 小沢美津子

東海短歌賞

みすぼらしさ見すなと病む娘にはげまされ行
商の朝は若く化粧する 横江 ふみ

マルサン賞

よどみろし河面を夜は灯を写しゆるく動きて
潮を匂はす 高島 尚子

運営に協力した人々

田中 旭・平野 宏・長谷川禎一・井手けい子
川口一麿・渡辺靖之・羽田寿恵子・青木朝子・
寺田桂子・佐藤茂正・後藤富士子・上田治史・
大林栄一・杉山賢二・須永秀生・秋元文江・
杉山杏子・高島尚子・岡本和民・岡本淳子・
林 輝彦

第二十回 牧水祭

昭和四十八年

○碑前祭 九月三十日午前十時 千本歌碑前

献酒とお話(父のこと)・若山旅人氏

献花・井手けい子 短歌朗詠・大悟法進氏

沼津合唱団合唱

千本の松に名前をとの市の公募がさきに行われ
ていたものの結果の入選発表。

野点の赤い傘の下に、甘酒を温めてふるまった。
あいにくの雨天であったが、井手市長をはじめ
二百名の出席があった。

○講演会 牧水祭二十回記念講演

九月三十日午後一時三十分 本光寺客殿

一、父牧水を語る 若山旅人氏

一、牧水のこと外 山本健吉氏

(沼津牧水会会報一九七四年一月発行

No.2に収録)

○短歌大会 十月七日正午より 沼津市文化会館

詠草数 百五十七首(五〇〇円)

出席者 百二十名

選者 伊藤祐輔・大岡 博・大林栄一・片山
静枝・桑高房治・佐藤茂正・積 惟勝・大悟
法利雄・高鳴健一・高原 博・原 昇・水城
孝・上田治史・若山旅人の諸氏

司会 岩崎竜明・芹沢初子・須永秀生

入賞作品(互選点プラス選者点)

牧水賞 夏蝶の低く飛び交うたそがれをくろぐろと密
閉の貨車のつらなり 青木 朝子

市長賞 艦とともに沈みしなれば生きてかえるすべな
きものを幻に追ふ 長田 純

市議會議長賞 工事現場に溜れる水へ身をかがめ女人夫が髪
を繕う 佐々木青史

教育長賞 舞ひこみし火蛾もしづかに放しやる手術の麻

酔醒めぬ娘の部屋

横江 ふみ

沼津朝日賞

亡き父の手あぶら沁みし鎌が二丁縄巻きしま
ま納屋に掛けらる 海瀬 みつ

東海短歌会賞

億年のすぎゆきがこれと怖れつつ触るる石筍
のしみとほる冷え 板垣 晴巳

山脈短歌会賞

捨てるために漁られし魚よ網の中に踊り汚染
の海よりあがる 杉山 道子

マルサン書店賞

母ゆきて怠りながき眼には沁む柿の若葉に降
る昼の雨 杉山 杏子

尚、選者三首選の中の第一位の作品にそれぞ
れ選者賞がおくられた。

○歌人若山牧水 パンフレット

内容 牧水略年譜 短歌九首

沼津周辺の牧水歌碑

沼津の人と街に愛情

第二の故郷

発行所

発行人

編集人

露木 豊

林 輝彦

沼津牧水会

田中 旭

上田治史

第二十一回 牧水祭

昭和四十九年

○碑前祭 十月六日午後一時

献酒・献花 若山旅人氏

朗詠・大悟法利雄氏

沼津合唱団合唱・岳心流有志の朗詠

沼津民謡会・須田社中有志の踊り「千本松原」

他

この年初めての芝酒盛を実施。おでん・しめさばを振る舞う。参加者二〇〇名

○短歌大会 十月二十日正午 本光寺客殿

詠草百七十八首(五〇〇円) 参加百五十名

選者 高原 博・高嶋 健一・大岡 博・

伊藤 祐輔・上田 治史・佐藤 茂正・

桑高 房治・片山 静枝・若山 旅人・

大悟法利雄・原 昇・水城 孝・

積 惟勝・大林 栄一の諸先生方。

入賞作品(選者団・互選合計)

牧水賞

迫り来る死期を知らずに居る妻と電車の窓に

見る冬の虹

市長賞

われの不運を嘆きし酒と知らぬまま夜毎乱る

る父をうとみき

市議会議長賞

葱折れておりたる記憶ちちははの欺かれやす

くうみたまいける

教育長賞

秋づきし日ざしにタイルの目地みがく胃カメ

ラの診断こともなき日に

沼津朝日賞

梅雨降れば切れ味よしと草を刈る夫のかたえ

に我も草引く

マルサン賞

馴らされて人がするごとと拍手せるあしかは哀

し海を背にして

山脈賞

焼却場の拒否高まりて捨て場なき製紙滓の山

崇み傾く

林 よし子

東海短歌賞

祭より帰りきし子がわれによるそのたび甘く

綿菓子のにほふ

○十月が市の芸術祭月間となったため牧水祭もそ

れに合流し十月に実施さる。

○六月 『父・若山牧水』 石井みさき 五月書

房より刊行

○八月 故若山臺志子先生 七回忌

○五〇一年一月 沼津牧水会会報No.2発行

○四月 県歌人協会会長 高原 博氏歌碑建立

県立女子大学日本庭園のひと隅

『この拓きし丘にはげしきもの興るとい

ふにあらね花滴々と』

第二十二回 牧水祭

○碑前祭 十月五日午后一時 雨天

献酒・若山 旅人氏

献花・井手けい子氏

朗詠・大悟法利雄氏

沼津合唱団合唱

小雨の中で式を行い、その後、千松閣へ移って

おでん・干物を肴に地酒で酒盛り、去る九月二

十八日の歌会の入選歌の発表。舞台で詩吟、踊

りなども披露され、落着いた半日であった。

○短歌大会 九月二十八日正午 市公会堂三階集

会室 詠草二百五十首(五〇〇円)

参加者百二十名

選者 伊藤 祐輔・上田 治史・大岡 博

大林 栄一・片山 静枝・桑高 房治

佐藤 茂正・積 惟勝・大悟法利雄

高嶋 健一・高原 博・原 昇

若山 旅人の諸先生。

八名の講師が分担して短評を行い、選歌発表の

のち第二部自由討論としていくつかの作品

をもとに熱のこもった発言があった。

入選作品(互選プラス選者点)

牧水賞

負へる子も黄塵にまみれ當庭に許されし間を

せつなく逢ひき

市長賞

わがむねのうちなるうみをただよへる夏喪ひ

し麦藁帽子

教育長賞

骨董はいまだほてりの残りおり父よいま家の

さるすべりの前

市議会議長賞

操車場の貨車くろぐろと雨に濡れスト権奮還

の文字ゆがみたり

沼津朝日賞

冷水をみたし素麵さらしおりかく只ごとにな

が終の日も

マルサン賞

老い呆けし母がかなしく口ずさむ歌よ還らぬ

兄ききたまえ

山脈賞

無口なりし姉が最後の叫びかと葬る火おとに

立ち竦みたり

東海短歌賞

癌病めるわが口に合う食べものを日毎とどけ

くる肩おちし老夫

温古堂賞

むぎわら帽子庭木に一つかかり居てこの家の

あるじ昼寝むさぼる

高杉 みつ

追憶・積先生と牧水祭

久田二郎

昭和五十八年に死去された積惟勝先生は、生涯を恵まれない児童の養護教育に尽くされた方であったが、また一方で地域社会の文化運動に挺身され、その初期に努力を傾注されたのが沼津歌人杜（のちの東海短歌会）の育成と、若山牧水の顕彰であった。

二十八年秋には沼津歌人杜の主催による「牧水を偲ぶ会」を開催している。これは、歌の一結社による地域社会への呼びかけに危惧はあったが、結果は目を見る程の成功であった。

このじぶん、既に多くの協力者が先生の回りに集まっていた。当時、芝浦機械（東芝機械）における文化運動によって組織を離れた井手俊彦さん（のち沼津市長）と私ら五人は印刷の仕事を開始した頃であったが、「偲ぶ

会」のポスターが会心の出来であった事を思い出す。（これが資料として現存しないのが残念）憶うに、この二十八年度の「偲ぶ会」は、いま三十余回を数える沼津牧水祭の、記念すべき発起の催しであったのである。

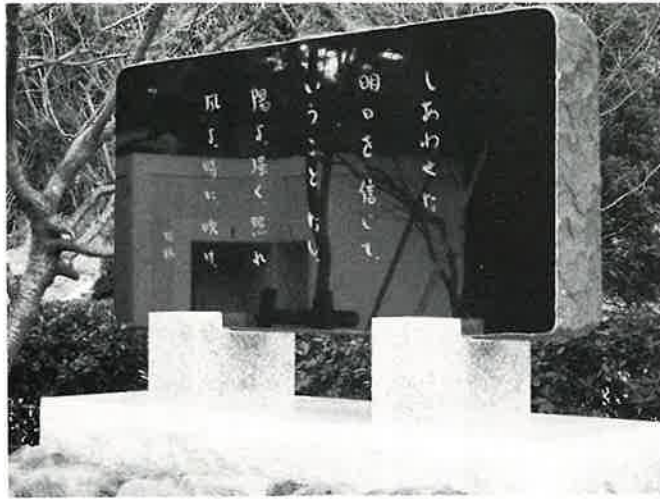
翌年の第二回は千本松原に隣接する沼津西校が会場。渡辺順三・土岐善磨両氏を講師に四百余の参加者があった。

この牧水祭創生の頃に、旺盛な創作欲をもつて参加していた人々に、長谷川（佐藤）茂正（故人・東海短歌）・飯塚正己（あるこ）・杉山重義（曾根耕一・東海短歌）・井手けい子（故人・創作）・大井田隆（故人・桃中軒支配人）・端山和夫（税務署）・小野力蔵（万葉学者）・小池富夫（歌集・湧水の町）・今林康夫（日軽蒲原）・芹沢初子（山脈）・工藤与



助（国鉄）、そして若い働き手であった杉山英和・大木英夫・菅田信子・庄司圭子・森清江・杉本さよ・勝又育子の人々が思い出される。

このように、積先生のもとに人らが寄ったのは、新しい時代を見とおす先生の、社会や人生についての考え方への共感であった。着実に年毎の牧水祭を催す中で、先生を囲む人らの熱意のたかまりは、牧水ハガキ、牧水手



拭、冊子、郷土を歌った牧水の歌、を作り出していった。

積先生の牧水顕彰への熱情は、やがて頂点を迎える。座談会（人間牧水を語る―沼津在住時代の思い出）の開催である。それは、牧水を知る人々が在世のうちに、「沼津と牧水」を確認する意図によるものであった。いまに残るその記録は、牧水研究の重要な一翼を担うものと思われる。（※）

昭和三十三年五月三十日、場所は川廓の千成旅館であった。喜志子夫人・岬さん・大悟法氏を迎えて、土地の牧水を知る人として長倉宜一（牧水門人・元市長）、鈴木俊一（門人）・井上健一（浮影楼主人）・菊池敏治（牧水友人）・芹沢だい（湖月女将）・芦川勝郎（耕文社）・田中要吉（門人）、の諸氏、それに同席者として積惟勝（司会）・村上真（医師）・大井田隆（桃中軒支配人）・長谷川禎一（菊屋旅館主）・久田二郎の名が見える。（今この大半は鬼籍の人となられた）

その席の話に出たエピソードがある。牧水が沼津から「創作」を出していた当時ののはなし――。「創作」の印刷を引き受けていた印刷所は耕文社である。その牧水係りの芦川さんが伝染病で入院する。病気が病気ゆえ見舞いに来る人はいない。その時「牧水先生が

見舞いに来て下さった」と、出席の芦川さんは感慨を込めて話した。まさに「人間牧水」を知る良い話であった。

積先生の葬儀は、菩提寺が驚くほどの盛儀であった。六百余の参会者が境内を埋めた。葬儀委員長井手敏彦氏の弔辞の一節、『沼津に戦後の青春があったとすれば、それは、まぎれもなく、積先生と松風荘のなかにありました。平和と民主主義を大事とする大勢の人々が、事あるたびにそこに集まり、相談しました。そこから初めての原爆展が生まれ、警職法や教育二法改悪を阻止する抵抗が芽生えました。歌を作る仲間が増え、牧水を顕彰することも教わりました。』

先生没後七年の昨年、先生を慕う有志のあいだで、記念碑建立の企てが急速に進んだ。募金を呼びかけて半年、目標の倍額が寄せられ、十一月十一日、壮麗な歌碑が除幕された。

※座談会記録「人間牧水を語る」（A五判・四五頁）は相当数が手元にある。

希望者に呈します。送料二一〇円（郵券）同封、左記へ。

千四一〇 沼津市下香貫善大夫三三三五
「第一印刷」（久田）

牧水生誕の地に立つ

— 坪谷の牧水歌碑まつりに参加して —

青木 朝子

長雨に三島の大場川の堤が決壊し、家一軒がそのまま濁流に押し流されてしまったという朝のテレビの映像を眼裏に、平成二年九月十六日、全日空宮崎行ANA607便の機上の人となった。友人で、エッセイストの稲垣滯子さんと同行二人、共に九州も、搭乗も初体験のやじきた道中である。

牧水終焉の地沼津で、二十数年にわたってその顕彰の末端を手伝わせて頂いて来た私にとって、生誕の地への思いは深く、この度東郷町坪谷の「牧水歌碑まつり」へ招かれたことは、天からの賜りもこのように思われ、その喜びと、沼津牧水会からの参加という緊張感とのないまぜの出発である。

生誕の地、それは選ぶことの出来ない自然の恵みであり、人の一生は時を語る旅人であるとすれば、とりも直さず坪谷——沼津は牧水の心の旅路の出立と終着の地である。

母親のまきさんに連れられて山畑へ行き、野良仕事の間を、傍らの川原の小石や、鳥や虫や、小草を相手にひとり遊びをする少年の心の中に根づいた限らない寂寥感、生涯牧水を捉えて離さず、それは単に大衆性にとどまらぬ純度の高い感傷性となって人々の心のひだにひびき、世代を超えてなつかしく愛誦される作品の原点となつたに違いない。

そんなはるかな思いを乗せて機はやがて宮崎空港到着。南国情緒

豊かな宮崎市の街並は初秋のさわやかな風に明るかった。

東郷町教育委員会がさし向けて下さった車で、市内牧水ゆかりの地を経て、この度の宿泊所である日向ハイツへ——。五時すぎ到着。大急ぎで夕食ののち「歌碑祭り前夜祭」へと再び車を走らせてもらう。

日向を出て、耳川の清流に沿って走ること十二キロ、山陰という部落に着く。東郷町役場の所在地である。冠嶽という対岸の山が、額に迫るような高さで鋭さで聳えている。

更に耳川の橋を渡り、支流である坪谷川の溪流を左手に、右岸に連なる山々を見ながら八キロあまり進むと坪谷の部落である。

坪谷は山と山との間に挟まれた細長い峡谷である、と牧水は『思ひ出の記』に記しているが、そのとつっきの、尾鈴山を正面に望む位置に、牧水記念館と生家は並んでいた。

会場である牧水公園は、記念館前を流れる坪谷川を渡ってすぐそこにあった。広大な敷地には、ふるさとの家、コテージ（五棟）パークゴルフ場、キャンプ場、牧水庵、自然プール（坪谷川の流れをせき止めたもの）などが見事に配置され、ふれあい広場は緑の絨織の芝生が見の限り続いている。宮崎市、日向市、東郷町あげての牧水顕彰の熱さに直に触れた思いであった。

前夜祭の地芝居は、その「ふるさとの家」の裏側を舞台にしつらえてあり、芝生にゆったり腰をおろして観客が大勢集まっていた。地元青年団のみなさんによるオリジナル劇は方言そのままのセリフでの熱演に拍手喝采。素朴な暖かさは夜の更けるのも忘れさせた。十七日早朝、歌碑まつりの前の時間を利用して、教育長の渡辺邦彦氏に、牧水の足跡を案内して頂いた。

米の山の頂の歌碑は、生誕一〇〇年記念の建立だという。

日向のくにむら立つ山のひとつ山に住む母恋し秋晴れの日や

この母恋いの歌碑は、秋のはじめの細雨にけぶりながらその威風をただよわせていた。

芝草の中に埋もれるようにして可憐に立つ「お秀の墓」はやさしく丸みを帯び、牧水と連れ立つ姿も彷彿とする細島海岸は、白波が静かに渚を洗っていて束の間の旅情をそそる。

貧しい予備知識をたぐりながら蹤いていく町のいたるところに、歓迎の標識や、歌のしるべなどがあり、人々の牧水へ寄せる思いの深さがしのばれるのだった。

午前十時、記念館の裏山にある歌碑の前でいよいよ「歌碑まつり」がはじまる。

東郷町牧水顕彰会(会長木村映一町長)主催のこのお祭りは、例年九月十七日と定められ県内外の短歌愛好者と、人間牧水を思慕する人々によって、おごそかに神事からすすめられてゆく。

祭詞奏上、主催者挨拶、巫女による献酒、会長献酒と続き、沼津牧水会も献酒の栄を賜り、私はおそるおそる竹の柄杓で歌碑へ酒を注いだ。昭和二十二年建立という黒々と苔むした大きな岩のような歌碑は、傾斜がなだらかで、酒はゆるやかに碑文字の上を走って行った。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきてをりこの日、坪谷の小学校、中学校は休校で、生徒達はこぞって参列して牧水の歌を斉唱、その澄んだ歌声は山の緑へしみ込んで行った。厳肅なうちに歌碑まつりは閉式となり、このあと「ふるさとの家」に会場は移されて、「牧水をしのぶ会」となる。

ここでは、恒例となっている応募歌の入選者表彰式が行われた。小学校、中学校、高校一般の部とそれぞれリボンをつけた入選者達が晴れやかに参列し、ひとりひとりが壇上で表彰される。まさに牧水生誕の地にふさわしくまぶしい光景であった。(選者は若山

旅人氏)

小学生天位 越表小一年 甲斐聖隆 君

プロレスがすきでたまらんおとうとはやられてもやられてもかかってくるよ

やがて受賞者を交えての昼食会。婦人会の皆さんの山菜を中心とした手料理、むすびを頂きながら、床に車座となって歓談しきり。朗詠、即詠歌の披露、独唱とにぎやかに昼の刻が過ぎていく。外は台風の前ぶれか、明るい雨が時折窓を叩く。くつろいでいる私の目の前に、突然、テレビカメラが迫って来た。インタビュアーである。

これはその日の夕方に放映されたとか。別れを惜しむ面々が、牧水が延岡中学時代に描いたという絵の緞張の前に並び写真におさまってようやくお開きとなった。このあとふたたび車の人となり、牧水の出身校である坪谷小学校を訪れる。玄関に丸型の赤いポストが置かれ、児童達は、歌が出来ると、手製の短冊に書き込み投函する。それが月一度の文集となり、すでに長い歴史を持っているという。選者は教育長の渡辺邦彦氏である。短歌が生活の中にすんなり溶け込んでいて、挨拶をしてくれる多くの瞳が輝いていた。

自然との合体を目ざしたと言われる牧水の志向もやはりこの豊かなふるさとに少年時代を過ごした原体験から発していることを、この地を踏んではじめて実感出来た。

不世出の歌人を土地の誇りとし讃え、長く後世へひきつぐことに心を寄せ合うさまに触れて、人がふるさとをなつかしみ、大切に思う心はこんなにも豊かさに満ちていることかと、そのかかわり方のひとつひとつに思わずにはいられなかった。牧水にどっぷりつかつた二日間、絶えずどこかで、牧水の歌が、心が、バックミュージックの様に流れているのが聞こえていたように私は思う。東郷町の皆様にお借りして厚くお礼申し上げます。

サロン音楽の夕べ



1990・12・15(土) PM 6:30
桑形亜樹子チェンバロ リサイタル



1990・9・8(土) PM 6:30
御喜美江アコーディオン コンサート



1991・3・29(金) PM 6:30
キャバレー・ヴォルフガング・モーツァルト



1991・3・10(日) PM 6:30
夢鳴群(男性合唱) コンサート

平成二年度の音楽イベントとして、四回のコンサートが行われた。内三回は牧水会会員で音楽評論家の池田逸子さんの企画により、開催され、次第に来場者も増えている。

出演者もハイレベルの方々に趣向をこらしての熱演だった。順を追って、一回目は珍しいクラシックアコーディオンの演奏。奏者の御喜美江さんは16才で西ドイツ留学。以後サントリーホール他にて公演を数多くこなして活躍中。二回目はチェンバロを持ち込んでの桑形亜樹子さんの演奏。芸大在学中に渡独し独のデトモルト国立大および、シュトガルト国立音楽大卒業以後公演活動中。ケルン在住。三回目は、芸大卒業を中心とした音楽仲間の合唱グループの懇親発表会。そして第四回は遠方からも来場者を集めた林光出演のコンサート。林さんは周知の作曲家。オペラ曲中心に放送音楽（NHK大河ドラマ等）も手がけている。当日は主にピアノ伴奏と語りのパートだったが、中で林さんも独唱した。バリトンの大石哲史さんは京都市立芸大卒。歌いぶりは終始、即興的な寸劇やコメディタッチの運びで会場を沸かせた。

文化講座



第一回 文化講座

平成2年11月17日(土)

文学の中の沼津…興国寺城と小説

前沼津市立高等学校教頭 友野 博氏

戦国時代の武将の中から、北条氏勝・天野康景・本多作佐衛門の三人を取り上げて文献の調査で浮かび上がって来たその人物像を掘り下げる。資料の読み方も含めて、興味深い講座であった。参加者の少なかったことが、今回はうまく作用して、講師と膝をまじえての暖かい講座になったように思うが、やはり、これだけの話を勿体ないという気持ちも強かった。

第2回 文化講座

平成3年1月19日(土)

記者生活30年の雑感

元毎日新聞沼津・甲府支局長・

現岳南朝日新聞論説委員長

佐野 栄代氏

記者生活30年の中で培ったうん蓄は多岐に亘って、豊富な経験の披露は時間を忘れさせる講座であった。ご自身の経験だけでなく、例えば、ビキニ事件・第五福竜丸事件のスクープの裏ばなし、戦後の三大誤報事件など、マスコミの取材の問題点を反省しながらの話は、これも小人数では勿体ない講座で、是非これからの講座への参加をお誘いしたいと思った。



第3回 文化講座

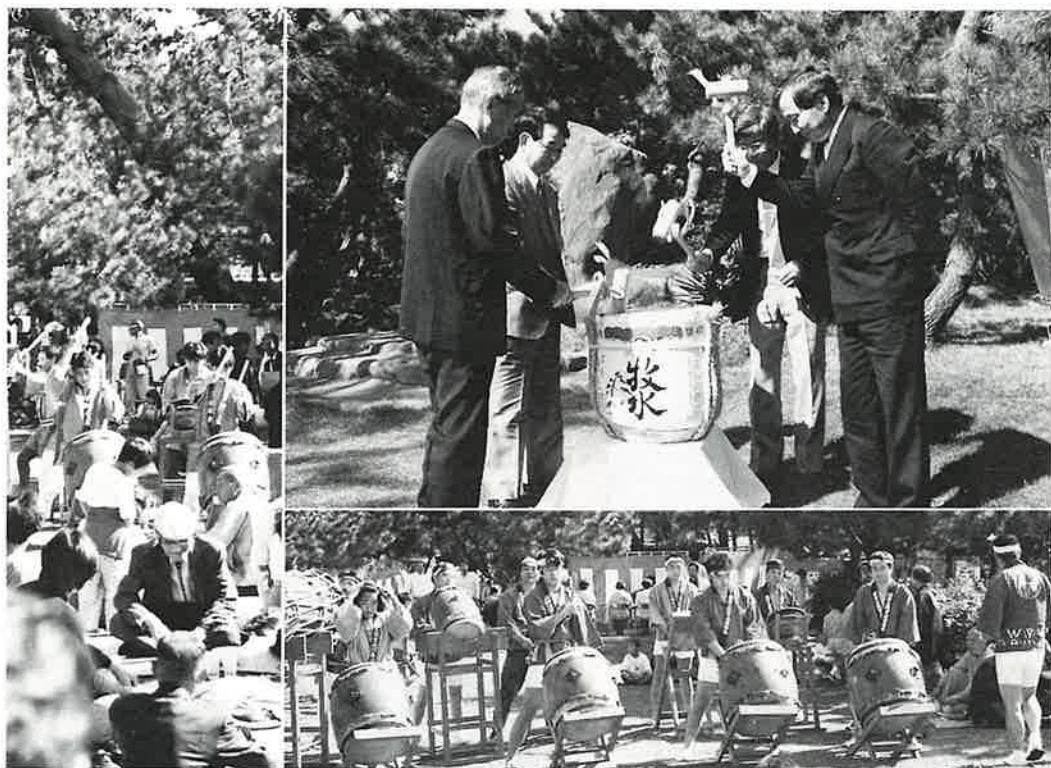
平成3年3月16日(土)

やき鳥式文章法

沼津高専助教授 鈴木 邦彦氏

文章を書くということは焼き鳥みたいなものだ。肉があって葱がある。また肉で葱といった発想で、自作の文章をもとに、肩のこらない中に、文章作成の急所をついた味わい深い講座は楽しいひとときであった。受講者数、34名

第37回沼津牧水祭・碑前祭



第三十七回沼津牧水祭・碑前祭は、平成二年十月二十一日、快晴の秋空の下で華やかに催された。

心配された天候も、その念いが嘘だったかのような回復ぶり。当日がファミリーマラソンの日と重なったこともあって、予定外の参加者も多く、例年の五百人を上回る会となった。碑前祭には、また市長選の印象も生々しい、新市長・桜田光雄氏、教育長・杉田克己氏が祝詞を寄せられ、次いでのお献花、献酒は、牧水の孫の若山聚一御夫妻が務める。献茶は東海庵青龍氏。

そして、鎮魂の合唱は、沼津合唱団。作曲、指揮の中村義光氏は、高齢かつ体調も完全とはいえない中を押してのご出演であった。その後はこれも恒例となった花柳稔氏一門による舞踊。今年は門下二人の麗人による踊り、合唱、舞踊共に印象的であった。

芝酒盛は、市議会議長西山次雄氏の音頭による乾杯に始まり、本年もご好意で出店下さった、いくつかのお店によるサーブス。桃中軒による、そば、うどん、おでん。お酒も当初の予定を、はるかに超える追加量となった。沼津太鼓、煙火太鼓の演奏も会を盛り上げ、いかにも牧水を偲ぶ芝酒盛にふさわしい会となった。

なお、裏でこの会を支えてくれた、多くの方々からお礼申し上げます。

短歌大会



位の作品を中心に問題になりそうな作品をいくつか挙げて、歌会様の会とし、午後からは、馬場あき子先生の講話、選評が行われた。

選者賞・牧水賞第一席

○窯出しの陶器の冷ゆる音さこゆささやくごとく胸に沁むなり 川村 富子
窯から出す陶器の命を捕らえて過不足なく表現している。ささやくごとくが疑問。あの音はささやくごとくとは違うように思える。

選者賞・牧水賞第二席

○盆棚へすいっとび来し銀やんまあつ、弟かもよ「南海戦死の 山本ことみ
こう言う歌も良い。口語発想が生きている。あつ、弟かもよに、戦後四十五年の経過が感じられる。深刻ではない感慨が納得させる。

選者賞・牧水賞第三席

○平らかに白雲かがやく暑き日を深き瓶より梅の実を干す 朝比奈ふく
平らかにが気分のいい表現。平明で梅の実を干すという行動が生かされている。深き瓶が何故深い瓶なのか分からない。

以下 選者賞(馬場先生選)

○指先より小さき光交わすごとく手話する少女車窓に二人 坂部ヨシ子

○照らしゆくヘッドランプの輪の中に夜の蟬短く啼きて落ち来ぬ 仲村 正男

○悔多き来し方思いワープロの「取消」「変換」羨しみて押す 土屋さち子

平成二年十月六日

短歌大会が市内常盤町の自治会館において行われた。朝のひととき、丁度、会館に来られる頃に激しい雨となつて、特に早めに来られた方は大変だつた。その後、雨が上がつて良い天気になつただけに悔しい朝の雨であつた。

午前中は、互選の上

○継ぐ子らもなしと思えばいたわりて蜜柑をつくる老いのすさびに 三和せつ子

○就職の内定通知届きてより子の起き臥しの柔らぎて見ゆ 今井万起子

○百歳になるとう土牛声もなく富士に涙す描けぬと言いて 小林千枝子

○子の継がぬ農にはふれずなづなしく畑に夫と豆の種子蒔く 前田百合子

○杉の木の検尺計りに読む声の太々と沢をつたはりきこゆ 稲村 怜

○父の息絶えにし朝よ庭一面朝顔は咲き陽の昇らむとする 彬里 慧

○父の息絶えにし朝よ庭一面朝顔は咲き陽の昇らむとする 西山 幸枝

○気楽とはしみじみ淋し簪二本洗ふに慣れて今日も暮れゆく 池谷 才子

○戦死せし子を恋う言葉遠のきて姑は小さく老い給いけり 加藤寿美子

○幾千の銀杏落葉がきらめきて還る土なき街に吹かるる 前田百合子

○子の継がぬ…… 坂部ヨシ子

○指先より…… 山中さち子

○農継ぐをうとみて泣きし日も遠く峡田にすがり細く老いゆく 佐野 宏子

○夕雲の棚引く空にもう誰も乗らぬ観覧車濃き影となる 稲村 怜

○互選賞 八位以下十位まで 山田ふじゑ

○杉の木…… 青木 朝子

○飢餓の子の頬にまつわる縄さえも共存するかに見ゆるは哀し 小林千枝子

○安全帽に陽はかけりつつマンホールの中へひとりの頭が降りてゆく 山脈賞 小林千枝子

○百歳になるとう…… 東海短歌賞 芹沢 ふく

○秋立てば食進まむと病む姑は知らずのみおりき丸山ワクチン 懇親会の中で馬場先生が、女性歌人達は引込み思案でやっかみが強い。もっと理論

で武装して、社会に出ようと女性に、傲をとばされる。「ここには男性六人に対して

女性は二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

女性に二十六人いる。それでいて負けていて。」は手厳しい意見であつた。(須永)

雑の歌会

平成3年3月3日

講師 大塚 布見子氏



第三回の雑の歌会が、講師に大塚布見子先生をお迎えして牧水記念館で行われました。歌会への出詠歌数六十五首。当日の出席者五十五名。おだやかない歌会日和の日でした。暖房も途中で切るほどの暖かさで、大塚先生も乗り気味に気持ちのよい批評をしてくださいました。雑の歌会は勉強で賞品などは何も無い訳ですが、以下問題になった歌。大塚先生の推薦歌。互選の高点歌などの一部をお知らせいたします。(……)の中の評は大塚先生の評。

大塚先生の推薦された歌
小春日の刈田に穀殻焼く煙り紫あはくたゆたひのぼる 木内 しげ
(情景の把握が成されている。あはくは甘くなるが甘くなくなることばが働
きあっている)

臘梅の透きたる小花三つ四つ小鉢に浮かして春の灯ともす 杉山 治子
(春の来るのを楽しんでいる。甘いようで甘さを感じさせない)
親子鴨流れにあそぶ狩野川の水面に夕べのチャイムが響く 久保 節男
(囑目詠にした方がいいのでは。親子が必要かどうか。思い込みをしない
ように歌いたい。)

神苑の懸け樋の水の音やさし竹の柄杓の青匂いつつ 浅井不二雄
(清楚な歌)

西風の荒るる鉄路に補修する工夫の腰に守り札舞ふ 山中さち子
(舞ふは揺れるぐらいで。材料が多すぎる。でも、やはりこの歌、採るわね)

互選高点歌 西風の…… 山中さち子

浮き沈みしつつ迎えし金婚の初春すがすがと御燈明ともす 川村 富子

谷川の護岸工事の昼休み若者のシャツ杭に揺れをり 杉山 和子

親子鴨…… 久保 節男

ぬかづけば心かよへり逝きし母の声あるごとき遠き風音 室伏 侑
(心かよえりはいらぬ。)

神苑の懸け樋の水…… 浅井不二雄

チグリスの青き蛇行のかき消えて映像はいま空爆を告ぐ 馬田 嘩子

問題になった歌 西風の……(意味で歌わない。) 近藤ゆみ子

運転手の視線をミラーが映しくる丁度その位置に座してしまえり 青木 初音

(面白さで歌っては駄目。運転手は後をバックミラーで見ていたかも知れ
ない。自分に視線がくるというのは思い込み)
ささくれしもの裡にある午後を来て湖の色せるブラウスを買ふ

(パターンを超えるものがないと人を感動に誘い込まない。)
まとめとして、歌は整えることが大事、一首の中に宇宙のあるものが歌。
整えるという事は、情を整えるもの。詠みだして、水のながれのように
響いてくる歌を詠みたいと話されました。正統派歌人としての筋の通った
批評は印象深いものがありました。

平成2年度事業報告

総会 5月18日(金) 19:00~20:10

理事会 第1回 4月27日(金) 17:30~19:00
第2回 5月18日(金) 17:00~19:00
第3回 6月13日(水) 18:00~19:30
第4回 8月9日(休) 18:00~21:00
第5回 10月9日(火) 18:00~21:00
第6回 11月18日(日) 16:00~18:15
第7回 12月23日(日) 18:00~20:10
第8回 2月19日(火) 18:00~20:10

館報発行

第四号 2年4月1日
第五号 2年9月1日
第六号 3年2月5日

会報発行

第三号 2年5月25日

調査研究事業

宮崎県東郷町 牧水祭参加 9月16日(日)~9月18日 青木理事 稲垣滯子

沼津牧水祭(第37回)

短歌大会 2年10月6日(土)10:00~ 常盤町自治会館
講師 馬場あき子先生 出詠302首 参加約200人
碑前祭 2年10月21日(日)11:00~ 千本公園歌碑前広場
参加 500人以上

文化講座

第1回 11月17日(土)13:30~
「文学の中の沼津」 講師 友野 博氏 参加12人
第2回 1月19日(土)13:30~
「新聞記者30年」 講師 佐野 栄代氏 参加12人
第3回 3月16日(土)13:30~15:30
「やき鳥式文章法」 講師 鈴木 邦彦氏 参加34人

雑の歌会

3月3日(日)13:30~ 会議室
講師 大塚布見子氏 参加52人

企画

市内中学校生徒、職員による短歌応募と優秀作品の展示
学校宛 依頼書送付 7月11日 9月12日締切 出詠数190首
優秀作 41首を11月10日(土)~25日(日)の間展示

音楽イベント

御喜 美江 アコーディオン・コンサート 9月8日(土)18:30~
桑形亜樹子 チェンバロ・コンサート 12月15日(土)18:30~
夢鳴群・岡田全弘による男性合唱とマリンバ演奏会 3月10日(日)18:30~
林 光、大石哲史による「キャバレー・ヴォルフガング」 3月29日(金)18:30~

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、社団法人牧水会という。
- 第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功勞のあつた者で、総会の決議をもつて推薦された者
- 第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもつて会員となるものとする。
- 第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 2 この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹
 〈副理事長〉 大河原二郎
 〈理事〉 杉山光男 上田治史
 河本與司幸 佐藤英之助
 寺田桂子 保坂輝夫
 川口和子 青木朝子
 八十濱俊一 須永秀生

（平成三年三月末日現在）

編集後記

会報は会員相互の融和と情報の源という常識から言うと相変わらずの報告記事で埋める形になってしまっていることを反省しています。牧水会の歩く道はまだこれから摸索しなければならぬのではないのでしょうか。かつての牧水会は牧水の顕彰を目的とした組織でした。しかし、これからの牧水会は沼津の文化の根っこの所で、その裾野を広げるような位置にいるように思います。長く牧水会の中核におられた大林栄一氏と、副理事長の佐藤茂正氏を相次いで失った上に、創設以来、会の指令センターだった上田治史氏が実務から退いて、必然的に会の方向を再確認しなければならなくなっております。色々とお意見などお聞かせ下さい。（須永秀生）

平成三年二月一日より社団法人沼津牧水会の事務員として入館して初めての会報発行にあたりました。といつても全て須永理事のご指示のもと、発行の運びとなりました。ご尽力に唯々感謝しております。

日頃より、皆様によくご来館頂けたり、若山牧水の業績を通して、短歌だけに停まらず、多分野の研究研鑽へと発展して頂けますよう、心して管理運営に務めて参りたいと存じます。（事務局 五十嵐由子）